

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 福岡県 】

学校名【 福岡県立早良高等学校 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ、Ⅴ 】
2 実施対象者	第2学年スポーツコミュニケーションコース 15名 (男子14名、女子1名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (スポーツコミュニケーションコース実習) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	仲間と協力してゴールボールに取り組む活動を通して、障がい者スポーツに関する知識・理解を深める。
5 取組内容	アダプテッド・スポーツ学習 (ゴールボール) ①日時：令和3年1月15日 (金) 9:00～ 9:50 12:00～12:50 ②場所：体育館 ③内容 ・ゴールボールの概要に関する映像視聴 (※写真1) ・視覚情報を遮断した状態でのボールに慣れる活動 (※写真2) ・ゲームのルールおよび進め方の説明 ・リーグ戦 (※写真3) ・感想シートの記入 【写真1】 

【写真2】



【写真3】



6 主な成果

①実際に体験することで、競技性の高さを実感できた

実際にゴールボールを体験するなかで、生徒たちは、特に視覚情報が一切ない条件下で競い合うことの難しさを感じている様子であった。目隠しをして音を頼りにボールに反応する練習の段階から、「ボールがどこにあるか分からない」「見えないことが怖い」「この条件で普通に競技している選手はすごい」などの声があがっていた。リーグ戦もたいへん盛り上がり、不慣れな条件下で競い合うことを全員で楽しんでいった。

以下、感想シートの記述の一部抜粋である。

- ・視覚がない状況で動くのはとても不安で怖かった。音のみに反応して動くのは、とても集中力が必要。
- ・まったく方向感覚が分からず、しっかりと耳をすまさないといけなくて、とても難しかった。
- ・目が見えないのに、ボールの音やフィールドにある糸だけで判断して動く競技なので、これを当たり前のようにする選手は本当にすごいと思った。

など

	<p><b>②「障がい」について思考する機会となった</b>  感想シートの記述をみると、単にゴールボールを体験しての感想だけでなく、視覚障がいについてや「もし自分にも障がいがあったら」という視点からも感想を記述している生徒がほとんどであった。  以下、感想シートの記述の一部抜粋である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 普段見たり聞いたりして判断しているものが、1つ失うだけでとても不便で、今回のゴールボールはよい経験になった。</li> <li>• 自分たちは当たり前のように目が見えて体が動かしてスポーツができていますが、体が不自由で自分のしたいように動けないなかでスポーツをしていることは、とても尊敬した。</li> <li>• 今、目が見えることが当たり前と思わずにスポーツに取り組んでいきたい。</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>
<p>7実践において工夫した点  (事業の特色)</p>	<p><b>①感染症対策</b>  新型コロナウイルス感染症防止対策の観点から、本来ゴールボールで使用するアイシェードは共用せず、各自で事前に準備したアイマスク等を代用した。</p> <p><b>②安全性の確保と競技難易度の調整</b>  ゴールボールは、障がい者スポーツのなかでも競技性が高く、選手同士の接触やボールとの接触によるケガの発生が考えられるスポーツである。今回の実践では、生徒がより安全に楽しく体験できるよう、本来のゴールボールで使用するボールよりも軽くて小さく、音の鳴りやすいブラインドサッカーのボールを使用した。</p> <p><b>③競技者以外の配慮</b>  リーグ戦に入る前に、実際に競技している人以外が気を付けなければならないこと、競技者のためにできることについて考えさせた。生徒から挙がった内容は以下のものであり、全員が守るべきルールとして定め、実践させた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 音が勝敗を左右する競技であるため、競技者以外は不必要な音を発しない。</li> <li>• 攻守の切り替え時のみ、競技者が必要としていければ立ち位置をガイドしてよい。</li> </ul>
<p>8主な課題等</p>	<p><b>体育理論・スポーツ概論・スポーツ総合演習などとの関連</b>  障がい者スポーツの体験から得られた学びが、単なる体感で終わることがないようにする必要がある。例えば、体育理論やスポーツ概論での学習内容と結び付けたり、スポーツ総合演習で障がい者スポーツに関する課題研究に取り組みせたりすることで、より一層理解が深められるのではないか。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>現段階では特になし</p>

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 福岡県 】

学校名【 福岡県立早良高等学校 】

1 実践テーマ	【 Ⅲ、Ⅴ 】
2 実施対象者	第1学年スポーツコミュニケーションコース 20名 (男子19名、女子1名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (スポーツコミュニケーションコース実習) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	仲間と協力してボッチャに取り組む活動を通して、障がい者スポーツに関する知識・理解を深める。
5 取組内容	アダプテッド・スポーツ学習 (ボッチャ) ①日時：令和3年1月15日 (金) 13:40~15:30 ②場所：体育館 ③内容 ・ボッチャのルール等に関する映像視聴 ・リーグ戦【4人リーグ、立位、利き手】(※写真1) ・リーグ戦【4人リーグ、座位、利き手ではない手】(※写真2) ・感想シートの記入 【写真1】 

【写真2】



6 主な成果

①体験のなかで競技特有の楽しさに気付くことができた

運動量が少なく、「障がい者のためのスポーツ」という印象が強いボッチャであるが、生徒たちは状況によって投げ方を変えたり、戦略を立てながらおこなったりすることが必要なボッチャの魅力に気付く、楽しみながら活動に取り組んでいた。時間が進むにつれ、生徒の一投ごとに歓声があがり、非常に活気のある実践となった。また、生徒が実際に競技するなかで気づいたボッチャの魅力に関する記述が、感想シート内に多くみられた。

以下、感想シートの記述の一部抜粋である。

- 投げ方や手首の使い方を工夫すれば、ジャックボールに近づくようになり、最後の競い合いが楽しくなった。
- ルールもそんなに難しいものではなく、短い時間で試合ができるので、とても良いスポーツだと思った。
- 転がすときの力加減やコントロールがとても難しく、やりがいのあるスポーツだった。

など

②「障がい者と共に」という視点を獲得できた

感想シートをみると、ボッチャを通じた障がい者との交流についての記述がいくつかあった。体験してみて「楽しい」というだけでなく、「一緒に楽しめそう」という感覚を得た生徒が多かったようである。

以下、感想シートの記述の一部抜粋である。

- ボッチャは障がい者スポーツという認識が一般的にはあるかもしれないけれど、そうでない人でも一緒に楽しめると思った。
- 障がいのある人、そうでない人のどちらとも楽しめるスポーツなので、もっと全国に広がってほしい。
- 障がい者とそうでない人も一緒に楽しくできると思った。その場合、障がい者に複数のハンデを課すと平等になり、両方が勝っても負けても楽しいゲームになると思った。

など

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p><b>条件やルールを変えながらポッチャに取り組ませる</b>        今回は、立位のまま利き手でボールを投げるルールで行った後、椅子に座り利き手でない手でボールを投げるルールに変更した。特に、利き手でない手でボールを投げるという動作において、生徒に「やりづらさ」を与え、障がいの疑似体験とすることをねらった。ただ競技させるだけでなく、ルールや条件を少し変え、「やりづらさ」や「難しさ」を与えることで、障がい者スポーツや障がいそのものへの理解を深めることができると考える。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p><b>科目体育における「球技」との関連</b>        本校の科目体育において、球技の授業では「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の中から種目を生徒に選択させている。この中に「ターゲット型」であるポッチャを組み込み、選択肢の1つとすることを検討したい。ポッチャを種目の1つとすることで、身体的な事情から十分に活動に参加できない生徒も、運動に親しむための良い教材となることに加え、体育系コース以外の生徒も、障がい者スポーツへの理解を深める機会とすることができるのではないかと考える。</p>
<p>9来年度以降 の実施予定</p>	<p>アダプテッド・スポーツ学習として、ゴールボールを体験する予定。</p>